

学習レベル別の指示詞「コ・ソ・ア」の 運用能力に関する研究

追田 久美子
(広島大学大学院)

はじめに

指示詞「コ・ソ・ア」は、日本語学習の初級教科書において、第1課から第3課までのかかなり初期の段階で導入される。しかし、その用法は現場の事物を直接に指示するという現場指示用法のみである。そして、それ以降教科書では「コ・ソ・ア」の現場指示用法以外、例えば文脈指示用法などに関して学習項目として取り上げられていないのが多い。しかし、日本語学習者にとって日本語の「コ・ソ・ア」の指示詞の用法は、現場指示の説明だけではなかなか理解が困難な広がりを持っており、中級・上級レベルの学習者でも会話場面などでその誤用が見られる。

いくつかの例を見ると、

「日本に来て、私知っているアメリカ人と話をしてね、あの人も日本語を聞くのはできますけど、しゃべるのはできないんです。あの人は英語でしゃべって私は日本語で答えます。」(中級, 韓国)

「彼はシニアリーダーで、あのー、活発な人で、活動をすごくする人です。だから、これで(彼を)好きかもしれません。」(上級, タイ)

「誰が日本語を教えてくださいますか。」「あれは、わからない。」(中級, メキシコ)

指示詞「コ・ソ・ア」の学習困難点はどこなのか、学習レベルが上がるに従って果たして指示詞の様々な用法の習得も達成されているのだろうか。

言語学習をコミュニケーション能力の学習という観点から捉え、対話の中でどのように学習者が実際の発話の中で指示詞「コ・ソ・ア」を使用しているか、つまりその運用能力について初級・中級・上級の各レベルで調べたいと考える。本研究ではインタビュー調査によって、対話における指示詞の中間言語について、以下の点を考察したいと考える。

- 1) 学習レベルが高くなるに従って、指示詞(非現場指示用法)の運用能力は伸びているか。
- 2) コ・ソ・アのどの用法が学習困難と考えられるか。

1. 指示詞コ・ソ・アの分類

(1) 先行研究

指示詞に関する研究は、多くの学者によってなされている。佐久間鼎(1951)は、「コ・ソ・ア」を「近称・中称・遠称」と認めた上で、「自称・対称・他称」という人称の対立関係と関連づけた。又、なわばりの概念、「勢力圏」という考えを提示した。

三上章(1955)は指示詞を含む慣用表現(アチラコチラ・ソコココ等)の中にソとアの組み合わせが無いことから楕円形(コ・ソの対立)と円型(コ・アの対立)の二種類の二項対立を提出した。

黒田成幸(1979)は独白場面ではア系(及びコ系)の指示詞とソ系の指示詞を調べることによって、それらの意味機能の対立を明確にした。

堀口和吉(1978)はコ・ソ・アの用法をそれまでの現場指示と文脈指示の二つに新たに観念指示・絶対指示用法等を加えて提示し、コ・ソ・アを親近・疎遠・親遠の表現性の違いと捉えた。

正保勇(1981)は、三上の楕円形、円的な状況を対立型、融合型とし、二種の二項対立ではなく、緊張したソ・ア、弛緩したソ・アの概念を用いて三項並列のコ・ソ・アの体系をまとめた。

金水敏(1988)は、フォコニエのメンタル・スペース理論(心的空間理論)を応用し、話し手と聞き手の間に「基底空間」「相手空間」「様相空間」「談話空間」等を設定することによって、コ・ソ・アの機構を解明しようとした。

又、神尾昭雄(1990)は、話し手又は聞き手と、指示対象又は情報との一次的な距離の概念で、指示代名詞の体系と情報のなわ張りと共に共通の構造を見出し、コ系は話し手のなわ張り、ソ系は聞き手のなわ張りに関わり、ア系は両者のなわ張り外に関わると考えた。

島守玲子(1990)は、久野の共感度の考え方をを用いてコ・ソ・アを数式で表すことを試み、宋晩翼(1991)は韓国語との対照分析に基づいてコ・ソ・アの用法を研究し、その指導法を提示した。

(2) コ・ソ・アの分類の基本的な考え方

上記の先行研究をふまえ、学習者の指示詞コ・ソ・ア（以下、コソア）使用を調査するにあたり、コソアの分類を試みる。

分類は従来の、現場指示用法と文脈指示用法の二分法が最も一般的であるが、筆者の調査においては、コソア使用の全体を現場指示用法か非現場指示用法かの二つを出発点とし、非現場指示用法のみを調査対照とする。これについては、以下の理由による。

① 調査はインタビューの形式で行い、自然会話場面における指示詞コソアの使用を見る。学習者とインタビュー어가接近した状態で会話を行う為、現場指示用法では融合型のコ（稀に状況によっては、ア）しか観察されないと予想される。従って、コソアの使用の差異は状況を対立型にしたり、意図的に現場でコソアの使用を促す場面を作らなければ出てこない。

自然な言語場面におけるコソア使用を調査対象としているので、現場指示用法を引き出す為の意図的な場面作りは避けたいと考える。

② 前章で述べた予備調査によると、日本語学習者による現場指示用法の正解率は高く、その使用に関してのゆれは全くといっていいほど見られなかった。

次に非現場指示用法の下位分類を堀口、正保を中心に、宋の分類も参考にして以下の通りとする。

- | | |
|----------|----------|
| a 絶対指示用法 | b 単純照応用法 |
| c 観念指示用法 | d 文脈指示用法 |

上記の分類を基に、日本語学習者のコソア使用を調査するにあたり、聞き手と話し手の対話場面におけるコソア使用の分類を試みる必要がある。その際、筆者は以下のことを基本的な考え方として提出する。

a) 指示詞の用法は明確に区別されるものではなく、連続性を有する。

b) 指示詞の用法は対象に対する話し手の気持ちが強く関わる。

c) 対話場面における指示詞の用法は話し手の聞き手への配慮が強く関わる。

(3) コソアの分類

前項での大まかな分類及び基本的な考え方を踏まえて、対話場面におけるコソア使用の分類を以下の通りとする。(図1 参照)

各用法の名称及び例文は次の通りである。

—コ系—

K-1 文脈指示用法2 (指示対象を話し手が持ち出す)
私の友達で酒が一滴も飲めない鈴木ってのがあるんだけど、こいつの奥さんがすごいんべえなんだ。(金水, 1990, p. 64)

K-2 文脈指示用法3 (指示対象を聞き手が持ち出す)

A: 来年卒業したらどうするの、家を継ぐの。

B: これは、まだきめてないんだ。むずかしくてね

K-3 観念指示用法(観念の中の対象を漠然と指示)
これならなんとかいけるかなあ。

K-4 単純照応用法(文脈照応的な用法)
これはだれにも言わないでほしいのですが、私は実は猫がこわいのです。(金水他, 1989, p. 46)

K-5 絶対指示用法(絶対的に話し手の位置を指示)
ここの人々はみんなやさしくて、親切です。

—ソ系—

S-1 文脈指示用法2 (指示対象を話し手が持ち出す)
私の遠い親戚で中村という人がいますが、今度その人が体を出したんです。(金水他, 1989, p. 41)

S-2 文脈指示用法3 (指示対象を聞き手が持ち出す)
A: ○○大学の吉田さんを知っていますか。

B: ええ、知っていると思います。確かその人は、松野君の友達でしたね。(同上, p. 43)

S-3 観念指示用法
ちょっとそこまで来たのですが。
(堀口, 1990, p. 65)

S-4 単純照応用法
犬はその飼い主に似る。(金水他, 1989, p. 47)

—ア系—

A-1 文脈指示用法1 (対話者同士の共有体験を指示)
A: 三年前、一緒にスキーに行ったのを覚えて
ていますか。

B: はい、よく覚えています。あの時は、本当に楽しかったですね。(同上, p. 34)

A-2 文脈指示用法4 (一方から指示対象を持ち出す)
ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。
(金水・田窪, 1990, p. 94)

A-3 観念指示用法
君、あの件は片付いたかい。(堀口, 1990, p. 64)

2. コ・ソ・ア使用の許容度

① 私の遠い親戚で中村という人がいますが、こんど {その/*あの} 人が本を出したんです。

(金水他, 1989, p. 41)

この場合、聞き手の知らない物事を持ち出して再び指し示すにはアは用いられないと考えられるが、堀口(1978)では、指示対象を遙かな存在として、しかし強烈な気持ちで話し手が捉えた場合はアで指すことも可能であるとする。従って、次の日本語学習者の例文。

② 「大阪ではフランス人の友達のお宅に泊まりまし

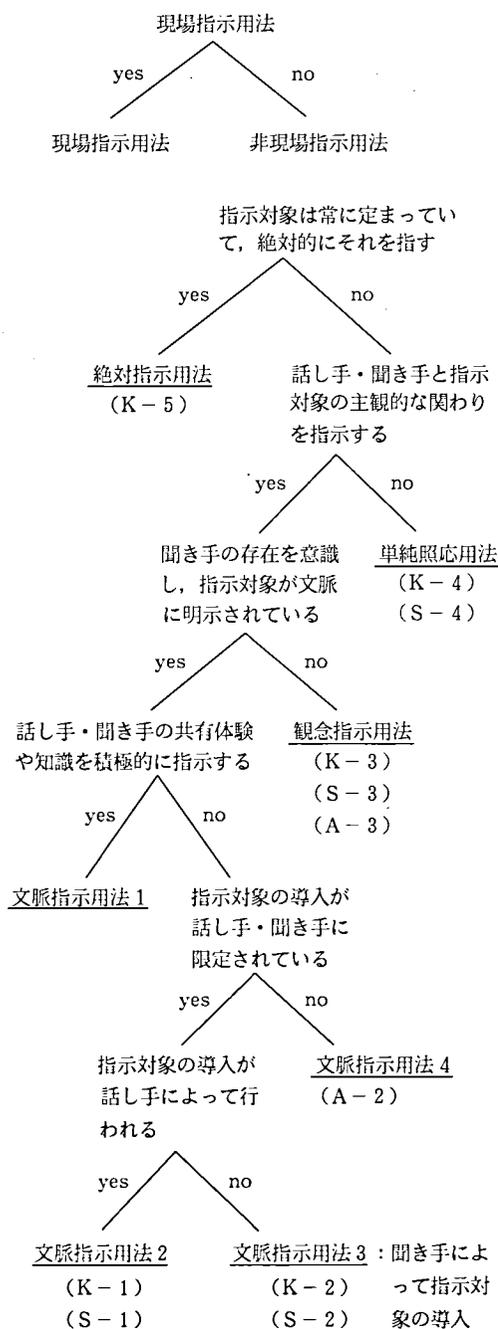


図1 対話場面におけるコソア使用の分類

た。フランス人は、〇〇大学の留学生です。あのフランス人のお宅にみんな泊まりました。」

も、たとえ聞き手がフランス人を知らなくても話し手の指示対象への遙かて親な気持ちの表現と考えればおかしくはないはずである。

現に、金水・田窪 (1990) もこの点について、次の例文を出して、言及している。

③ 「ぼくは大阪にいるとき山田先生という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいいよ。」(p. 95)

従って、コソア使用に関して文法的に正用か誤用かの判断で捉えることは難しいと考える。そこで、筆者はコソア使用をコミュニケーションの言語行動、つまり聞き手との対話の中で捉えた場合の許容度で捉えることを提案する。話し手の気持ち、或いは主観で選択されるコソアの使用も聞き手の存在が明確になると、その許容度に変化が表れると考える。

現に、金水・田窪は上記の例文も命令や質問に変えると許容度が落ちると指摘している。(pp. 95-96)

④ ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も {?*あの/*その} 先生につきなさい。

⑤ ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も {?*あの/*その} 先生につく気はありませんか。

この様に聞き手の存在や知識を顧慮する必要のある場合はやはり許容度がかなり低いと考えられる。①や②の例文も文法判断では誤用ではないと考えられても聞き手の存在への配慮の欠いた、許容度の低い文例と考えられる。

そこで、対話場面におけるコソア使用の許容度を調査した。方法と結果は以下の通りである。

方法：日本人50名がコソアの用法を会話文でふきこんだテープを聞いて、許容度+1, 0, -1のそれぞれに判断する。(アンケート表示は、○, △, ×)

調査内容：各文の指示詞を変えて、一回ずつ聞かせるイ. 1 A：三年前、一緒にスキーへ行ったのを覚えていますか。

B：はい、よく覚えていますよ。この(2その/3あの)時は、ほんとうに楽しかったですねー。

(以下省略)

調査結果：1) 用法K-2, 聞き手が持ち出した指示対象を話し手がコ系で指すのは許容度が極めて低い。

2) 用法A-2, 非共有体験の指示対象をア系で指すのは許容度が極めて低い。

3) 共有体験の提示及び一部の観念用法のアや、単純照応のコを除き、多くの場合対話場面ではソ系が選択される。

3. コ・ソ・ア運用能力の調査

(1) 調査の方法

初級・中級・上級の三つのレベルの日本語学習者を各々20人ずつ、計60人を対象に1時間のインタビューを行い、テープ録音した。

レベル設定に関しては、教育機関に属している場合は、原則的に属しているクラスのレベルと判断する。それ以外は、学習期間及び日本での滞在期間を考慮し、インタビュー前の簡単な面接により判断する。レベル判定が困難な場合は、複数の日本語教師の判断を求めて、判定した。

レベル判定の基準は、国立国語研究所から提出された(1986)「外国人留学生に対する日本語教育カリキュラム策定のための基本的枠組み」や日本語能力試験実施要項(1988)による日本語能力試験の設定基準に従うこととする。

母語が偏らないように出来るだけ様々な国の学習者を選び、性別も考慮した。大半は、留学生及び就学生、技術研修生であるが、主婦や語学教師で日本語を学習している場合もあった。全体で、22か国、18の異なる母語の学習者を調査した。

内容に関しては、統一の話題として「小・中学生時代の思い出の先生」を設定し、それから後は学習者の自然場面におけるコソア使用が調査の目的である為、出来るだけ意図的な会話は避けて学習者の自発的な発言によって会話が進められるように、自然な会話の流れに近づけるように心掛けた。

なお、日本人(成人:男性4人・女性6人, 20代~50代)10人も同様の調査を行い、結果を求めて、比較資料とした。

(2) 調査の結果

各学習レベル別にまず1時間の対話でどのくらい指示詞コソアを使用しているかを調べた。

表2 コ・ソ・ア使用数(1時間の平均使用数)

	E:初級	I:中級	A:上級	J:日本人
コ系-K	4.45	20.55	14.15	7.2
ソ系-S	5.85	18.7	62.55	81.4
ア系-A	0.7	8.45	14.4	27.8

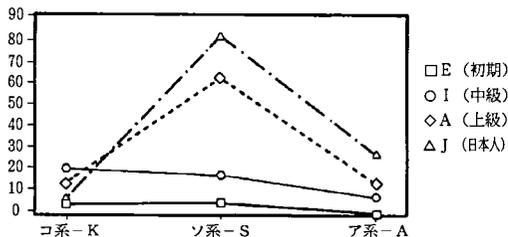


図2 コ・ソ・ア使用数(1時間の平均使用数)

このグラフを見ると、初級においてはどの指示詞もその使用率は低く、中級・上級に従ってソ・ア系は増加している。コ系は中級で、使用率が少し増えるが、上級では減少して日本人に近くなっている。注目すべきは、ソ系の著しい増加が上級に見られ、日本人のコソア使用の形態に類似していることが挙げられる。

次は、許容度別でその使用数を調べた結果である。

表3 許容度別のコ・ソ・ア使用数(平均)

	E:初級	I:中級	A:上級	J:日本人	
+1の場合	コ系	2.3	8.0	9.4	7.0
	ソ系	5.5	17.8	62.1	81.3
	ア系	0.1	2.55	5.95	25.4
0	コ系	1.25	8.9	3.85	0.1
	ソ系	0	0	0.05	0
	ア系	0.45	4.9	6.05	2.4
-1	コ系	0.9	3.65	0.9	0.1
	ソ系	0.35	0.9	0.4	0.1
	ア系	0.15	1.0	2.4	0

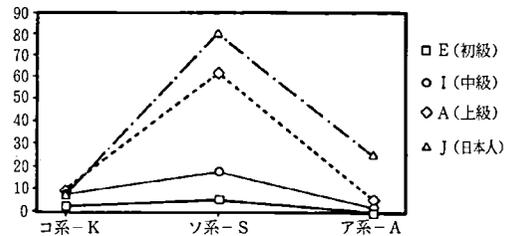


図3 許容度+1のコ・ソ・ア使用数(平均)

図2とあまり変化は見られないが、中級のコ系とア系、上級のコ系とア系の位置が低くなっている。中級・上級レベルの学習者は会話の中でコ系の指示詞を使った表現を用いようとするが、その許容度は低いものと考えられる。

次に、各用法の分類別の使用傾向を調べてみる。

表4 コ・ソ・アの分類別使用数(平均)

	E:初級	I:中級	A:上級	J:日本人	
コ系	K-1	1.4	9.95	4.7	1.2
	-2	0.9	3.5	0.35	0
	-3	0.95	2.6	5.3	3.1
	-4	0.5	1.85	2.0	1.2
	-5	0.7	2.65	1.8	1.7
ソ系	S-1	4.0	11.15	45.65	60.1
	-2	1.5	5.9	10.8	14.5
	-3	0.25	0.9	3.1	3.2
	-4	0.1	0.75	3.0	3.6
ア系	A-1	0	0.95	1.85	14.7
	-2	0.55	5.55	7.60	2.4
	-3	0.15	1.95	4.95	10.7

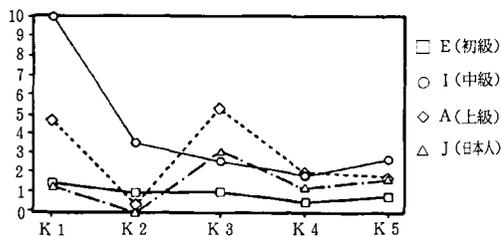


図4 コ系の分類別使用の分布

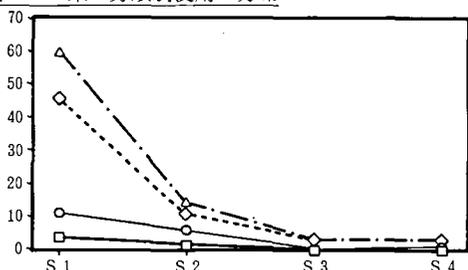


図5 ソ系分類別使用の分布

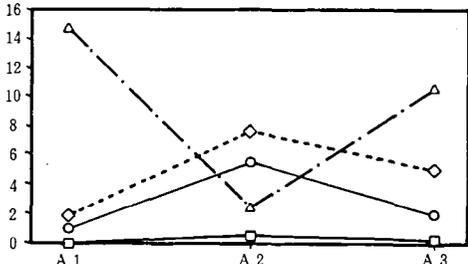


図6 ア系分類別使用の分布

図4のコ系の分類別使用の分布では、初級では大抵どの用法も低い数値を示しているが、中級に進むとどの用法も使用数が増えている。特に、K-1（話し手が持ち出した指示対象をコで示す）の用法は著しく増加している。又、K-2（聞き手が持ち出した指示対象をコで指す）の用法も高い値となっている。しかし、このK-2の用法は許容度調査で、低い結果が出ており、学習者の過剰般化の所産ではないかと考えられる。しかし、上級になると、許容度の低いK-2は減少し、日本人の使用数に近づいている。

K-1も上級に行くと、コの使用が激減し日本人の使用に近づいている。K-3（話し手の観念の中の指示対象をコで指す）の用法は、レベルが上がると共に増加している。

しかし、全体的に見ると初級では使用できなかったコソアが中級に進むと試行錯誤で使用されるが、上級に進むにつれその使用傾向が日本人に近づくという典型的な学習パターンを形成しているのではないだろうか。

図5のソ系の分類別使用の分布でも、レベルが上昇するにつれて使用数が増加している。特にS-1（話

し手が持ち出した指示対象をソで指す）の用法の増加は中級から上級レベルにかけて著しい変化を示し、その習得を示唆している。S-2も順調にレベルを追って伸びているので、S-1、S-2の使用の上達が学習レベルの上昇の鍵となるかもしれない。

図6のア系の分類別使用の分布は、コ系、ソ系の場合と状況を異にしている。初級ではどの用法も少なく、中級、上級に進むにつれ使用は増えて、特にA-2（共有経験でない指示対象を指す）の用法の増加が目立つ。ところが、この用法は許容度も低く、日本人の使用傾向と全く逆のパターンをなしている。

つまり学習者は上級になっても、共有経験の指示対象に対してアを用いないで、非共有経験の指示対象に対して、本来ならソで指すべき場合をアで指しているという傾向にあることがわかる。

4. 調査結果の考察

以上、調査結果からわかることをまとめてみた。

1) どの指示詞においても、初級では非現場指示の使用は少ない。これはテキストで入門期に現場指示のコソアのみを提示しただけである為、状況や文脈を考慮して非現場指示用法が使用できないと考える。指示詞使用ゼロの学習者も初級レベルに、数人見られた。

2) レベルが上がるにつれて、コソア使用も増えてくるが、ソとアは増加して日本人の使用に近づいているし、コは中級で急な伸びを示しているが、元来日本人の会話での使用が少ないことから上級では減少して日本人の使用パターンに近づいている。このことから、大まかではあるが指示詞の習得はレベルを追って進んでいると考えられる。

3) 日本人が対話場面であまり使用しないコ系の指示詞を頻繁に使い始めるのは、母語の転移や過剰般化によるのではないかと考える。しかし、上級になると、許容度の低い用法(K-2)等は使用されなくなるのでコ系に関しては、正しく習得が進んでいると考えられる。

4) ソ系はレベルを追ってその使用も増加している。特に中級から上級の使用の増加は著しい。そこで、聞き手の存在や知識を配慮した対話場面でのソの習得が中級から上級にかけて進むのではないかと考える。

5) コとソがレベルを追って日本人の使用パターンに近づいている傾向を示しているのに対し、アは使用が増加しているにもかかわらず、上級になっても全く別のパターンを示している。つまり、問題点はこのアの使用にあると考える。この理由としては、指示対象を聞き手との経験・知識と照合しながら使用しなければならないアの用法が習得できず、母語転移などにより指示対象を距離、時間的に遠い存在として把握し、ア

を使用するのではないかと考える。

5. おわりに

本稿では初級、中級、上級レベルの日本語学習者の運用能力を指示詞コソアの非現場指示用法に視点をあてて調べてみた。学習者の発話を分類するために、先行研究をふまえたコソア使用の分類を提示し、参考としてその用法の許容度の調査をした。

学習者60人、日本人10人のインタビュー調査の結果、本稿で次の事柄が明らかになった。

- ① 学習レベルが高くなるに従って、大体コソアの使用数（非現場指示用法）が増加し、その意味では運用能力は高まっていると言える。
- ② コトソの運用傾向は、レベルを追って日本人の運用パターンに近づいているので、その意味ではコトソは運用能力は向上していると言える。
- ③ アの用法は上級になっても、日本人の運用パターンと異なり、聞き手との共有経験か否かで選択されるアの用法が学習困難であると言える。

以上、コソアの間接言語について述べてきたが、対象を名詞句に限定したこと、学習者のレベルの判定が一斉テストなどに依るものではなく客観性に欠けること、コソアの用法に連続性があり、どの用法に分類すべきかの疑問が多々あったこと、インタビューの話題の展開によってコソアの使用に変化の可能性があることなど多くの問題点が挙げられる。

これらの問題点を整理しながら、母語の指示体系が二項の学習者（例えば英語話者）と、三項の学習者（例えば韓国語話者）とでは、コソアの習得に差がみられるか。また、日本人児童のコソアの習得との比較はどうか、など今後の課題としたい。

参考文献：

- 佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
- 三上 章（1955）『現代語法新説』刀江出版；復刊1972、くろしお出版
- 黒田成幸（1979）「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と』くろしお出版
- 堀口和吉（1978）「指示詞「コソア」考」『論集日本文学・日本語5』角川書店
- （1978）「指示詞の表現性」『日本語・日本文化8』大阪外国語大学
- （1990）「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』vol. 9, 3月, 明治書院
- 正保 勇（1981）「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所
- 金水 敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句

- の指示について」『女子大学文学（国文編）』第39号、大阪府立女子大
- 金水・木村・田窪（1989）『セルフマスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版
- 金水・田窪（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展3』日本認知科学会
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館
- 島守玲子（1991）「指示詞の論理」『世界の日本語教育』第1号日本語国際センター
- 宋晚翼（1991）「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究」『日本語教育』75号日本語教育学会